

旅後雑感

服部 健治

正直言って、今回の旅行団に参加するにあたっては当初躊躇があった。なぜなら仰々しくも「北東アジアの未来を展望する」と銘打っており、そんな大それた気負いは微塵もなかったからだ。ただ、以前から関心があり、調査もしていた中国と周辺諸国との辺境貿易、その一例である北朝鮮国境と接する延吉朝鮮族自治区（18年前に訪問したことがある）と中露国境の綏芬河の現場に行けることにまず興味がそそられた。

次に同じ東北地方といっても仕事柄、大連、ハルピンなどは何度も訪問したが、牡丹江、佳木斯、方正方面は足を踏み入れたことがなかったので、是非一度行ってみたいと好奇心が湧いた。そして何よりも書籍と映像でしか知らない満蒙開拓団の史跡をこの目で見たいと思った。たとえ研究で中国経済・産業のことは熟知していても、日中両国のあざなえる縄の如き歴史の断章を垣間見ずして、中国・日中問題にかかわる者として深みのある研究はできないと感得し、現地に行くしかないと観念した次第である。

まず何よりも今回の旅で得た満足とは、近現代の史実に強い関心をもつさまざまな経歴の方々や過酷な歴史を生き抜いて来られた人々と、バスに揺られ長い道中を通して友人になれたことである。ソ連軍の満州侵攻にともない逃避行を強いられた我が同胞の生き残りの方、今回訪問した都市に幼き頃に生活された方、満蒙開拓団を正史に留めようと資料収集、奔走されている方、苦汁の歴史の現実から日中のあり方を真摯に学ぼうとされている方、等々これまで私が指導してきた経済・ビジネス分野の訪中団とは一味以上も格別に違ったものだった。

二つ目の成果は、車窓に広がる中国東北地方の壮大な大地を満喫できたことだ。晩夏の日差しに映える深緑と黄金色の耕地が広大な草原として洋々と八方に広がり、青々と茂る稲田、さらに麦、大豆、とうもろこし、ひまわり、はたまた木耳などの畑が延々と地平線のかなたに向かってたなびく、その中を指揮棒のごとく一直線に走る高速道路、こうした光景は北海道富良野、美瑛の比ではない。真っ赤な太陽が遠くの山影に淡い光を放ち沈むとき、「満州」の持つイメージ、“ここは御国の何百里”と始まる軍歌『戦友』（本当は戦死の友を惜別する反戦歌といわれている）からくる連想、“赤い夕日の満州”を実感できた。

経済的に付け加えるなら、豊穡な土地は2004年から始動した、西部開発の一翼を担う「東北振興」政策の成果であり、農家に家電製品が多くみられたのは、今年から始まった景気浮揚策のひとつ「家電下郷」政策の一環であろう。

第3に「戦争の狂気」というものを体験できた。いわゆる旧ソ満国境の東寧でみた旧日本軍の地下要塞しかり、ハルピン郊外平房の731部隊陳列館を見て、正常な人間も戦争という極限の「恐怖」の中では「狂気」に変わってしまうと感じた。だが、石井中将率いる731細菌部隊を支えていたのは、敵からの「恐怖」というより、「民族の傲慢」が基本にある。日本軍国主義はユダヤ人に対してホロコーストを実行したナチスと違うという論調があり、旧日本軍は中国人をジェノサイドする思想はなかったと抗弁する人もいるが、中国

大陸における日本軍にとってはナチスと同様の心的状況、情緒に陥っていたとみるべきだ。中国人を人間と置いていなかったからである。

「民族の傲慢」はどこから生まれたか。それは19世紀以降の歴史で日本がアジア諸民族に対して奮起を促した歴史事実のなかに潜んでいる。それは3つある。ひとつは明治維新。近代的国民国家の形成は西欧民主制度の素地がない国ではできないと言われていたのを、非西欧諸国の中で唯一、日本は学制、兵制、税制を軸に近代的法治国家を作り上げた。アジア諸国が啓発され、畏敬する日本近代化の偉功は明治維新にある。

2つ目は日露戦争の勝利。欧亜にまたがる巨大軍事国家、ツァーロシアに対して20世初頭、最初の近代戦、つまり機関銃、トーチカ、魚雷といった近代兵器を使った戦いで、歴史上初めて有色人種が白色人種を旅順203高地で、満州の雪原で、そして対馬沖日本海で打ち負かした。どれほど欧米列強に打ちひしがれていたアジア諸国の民族が狂喜したことか。清国、コーチシナ、シヤムでは日本留学がブームとなった。

第3は戦後の高度経済発展。広島、長崎に原爆を投下され、大中都市のほとんどが焦土と化し、その上主要鉱物資源、食糧資源も欠いた、狭い4つの島から日本は不死鳥のごとく世界第2の経済大国にのし上がった。敗戦からわずか15年、ソニーが初めてニューヨークのマンハッタン五番街でショーウインドウを構えたとき、ともにがんばる多くの日本人ビジネスマンはどれほどの歓喜に酔ったか。日本のあとに4つのドラゴン（韓国、台湾、香港、シンガポール）が続いた。その日本の発展は開発経済学では「雁行形態発展論」として昇華していった。

しかし、日本の欠点は有頂天のあとすぐに傲慢になることだ。日露戦争に勝ったけれども、辛勝が真実なのに、一面を誇張し傲慢となりアジアを睥睨し始める。アジアにはアジアのナショナリズムがあることを理解しなかった。高度経済成長の行き着く先は金融バブルで、不遜にもアメリカ、オーストラリアの土地、建物を買収し始めた。米国にも自尊心があり、そんなに脆弱な経済でないことを観照しようとしなかった。成功のなかに傲慢がはびこっている。

今回の旅行を通じていろいろと根源的なことを考えさせられた。いまだ明確な回答を見出せずにいる。一つは満蒙開拓団には、敗走のなかで「被害者」となったが、入植時はブラジル移民と違い「加害者」の側面もあるという考え。それでは山東半島から満州に渡った漢族は、女真、満州族の土地を奪ったのではないか。その奪われた土地を日本が奪った。それでも満州開拓の日本人が漢族、朝鮮族と同様に土着化することができなかったのはなぜか。畢竟、その土地を愛せない支配民族であったからだ。

2つ目は、そもそも戦争には「正義の戦争」と「不正義の戦争」があるのか。満州事変から太平洋戦争に続く15年戦争は、明確に日本が中華民国の主権を犯した侵略であると認識するがゆえに、「抗日戦争」は中華民族の存亡にかかわる正義の戦いといえる。それでは日本の侵略戦争の過程にあって、ソ連の満州侵攻で繰り広げられた蛮行も米軍の原爆投下、

東京大空襲も正義の行為と言明できるのか。日本は侵略者だからどんな暴虐にも甘んじるべきだといえるのか。満蒙開拓団の悲劇は、正義に見せかけられた不正義の虐待の結果である。

3つ目は「民族の友好」とは何かという問いである。方正の墓地は加害者の遺骨が被害者の手によって祭られた聖地である。個人では殺人鬼の死体を被害家族が葬送することはありえないが、それが「集団」となって対峙したとき、死者全部に鞭打つことはできない。ましてや非戦闘員の死者には被害者も寛容になるべきだろう。その心理状況に「民族の和解」が醸成する芽生えがあり、方正はその原点と思われる。逃避行の最中、助けてくれた中国の農民も多数いる。さらに戦闘員ももとはといえば普通の庶民である。死んだ互いの兵士を悼むことで「民族の友好」の原点が形作られると夢想する。死に直面し怨讐を越えることが人間の摂理かもしれない。中国で浸透する、憎悪を喚起させる狭隘な愛国主義運動は、「民族の友好」を建設できるものでない。

最後に中国大陸における日本軍の横暴を日本の学校でも負の遺産として正視して教えるべきだ。欺瞞、言い訳は許されない。今や関東軍や731部隊、憲兵という言葉も知らない、ましてや盧溝橋事件も柳条湖事件も聞いたことがない生徒、学生が増えている。日本が尊敬される国家になるために過去を直視することは必要である。そのことによって日本の尊厳が傷つくことはない。日本の歴史には輝かしい側面もあれば、暗黒もある。それを認めて進歩することが日本の威厳だ。いつもずーと日本が正しかったと豪語することは恥である。勤勉で聡明で勇敢で進取の気概を持った日本民族はもっと自信を持つべきだ。仕事に取り組む真面目さ、清潔さ、高い公共道徳と秩序意識は多くの中国人も敬服している。

(はっとり・けんじ：日中経済協会北京事務所副所長、投資促進機構北京首席代表など北京駐在通算11年。愛知大学教授を経て、08年より中央大学大学院教授。専門は対中経営論、中国産業論。論文『日中経済の現状と対中経営戦略』、著書『現代中国』(共著)など多数)